

## スラッシャー教授の退任記念号に寄せて

学 長 中 原 俊 明

本学院論集の第9号は、スラッシャー教授の退任記念号になるため、編集委員長の伊佐教授のご配慮により私にも出番が与えられ、拙文をしたためることとなった。

大学の紀要といえば、教員として心血を注いだ研究成果を世に問うもので、緊張しながら取り組んだ自分自身の昔日の思い出がよみがえってくる。紀要は大学人にとって呼吸をしている証しであるし、大学としてはその研究水準を示して評価を受ける大事な媒体といえる。今回の紀要は、9号となるが、その年輪を示しつつ、退任されるスラッシャー教授へのはなむけとしてふさわしい記念号となるに違いない。

同教授は、ミシガン大学にて言語学の博士号を取得して、その分野の専門家として教育研究一筋に打ち込んでこられたのであるが、その点について言及する資格など、私にはむろんない。また個人的に長いおつきあいがあったわけではないが、かつて学長ご在任中に評議員会で何度かご一緒したことに始まり、2012年4月の私自身の学長就任以来、大学院の研究科長として種々貴重なご助言を頂く機会があり、またかつてお務めになった関西学院大学や国際基督教大学のこと、特にそこでのクリスチャン・コード運用の実情など、興味深い話を承ることができた。しかもコミュニケーション・ギャップを殆ど感ずることなく、お話しすること

ができたのは同教授の流暢な日本語のお陰だったと思う。

本学のアイデンティティーといえば、「キリスト教精神に基づく教育」であり、大学の憲法である寄付行為と学則にそれが謳われているのは周知のとおりである。そこで本学ならではのプログラムとして、毎週、月曜日には仲里朝章チャペルでの礼拝があり、学生、教員、事務職員が参加して「心の給油」をして一週間の活動がスタートするわけであるが、スラッシャー教授のお顔はいつもパルピット近くにあって、信仰の人 (man of piety) を印象づけられてきた。また本学の伝統として、保育士養成とともに英語教育が高い社会的評価を受けてきたが、最近目にしたある雑誌記事によると、教員全体に占める外国人教師（非常勤を含む）の比率が31.3%で、全国の大学中7位にランクされている（週刊東洋経済、10月27日号）。そのネイティブの先生方のリーダーの役割をスラッシャー教授が果たされたはずである。程度に濃淡はあろうが、全世界の人口の凡そ三分の一がクリスチャンであり、また三分の一が英語を話すという。このグローバルな時代に羽ばたく人材を育てる上で、同教授は、多大な貢献をされたと確信する。これまでのお働きに改めて感謝し、今後とも神様の祝福のうちに心身ともに健やかな日々を過ごされることを祈るものである。